
バカと記憶と召喚獣

フレイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと記憶と召喚獣

【Nコード】

N1058V

【作者名】

フレイム

【あらすじ】

親友の霧島と別れた高山じゅん。

ある日のこと少年は記憶を操れるという能力を手に入れた。

そんな時、翔子のいるところに転入する。

そして、Fクラスに入る。

楽しくストーリーを進めていきます

プロローグ（前書き）

初めて書きました。どうかお手柔らかに・・・

プロローグ

「ねえ、本当に行くの？」

女の子が言う

「うん、親の都合で行かなければならないんだ」

「私、寂しいよ」

と言って抱きついてくる

僕は女の子にキスをする

「僕はここに誓う絶対帰ってくるから。翔子ちゃんも僕のこと忘れないでね」

と言って僕はその場を去った

そして現在

「じゅん、ここ覚えている？」

母親は公園を指さす

「・・・記憶にございません。って言うか10年前の事なんてほとんど忘れてるよ」

「それもそうだよな。あつ、着いたわよ」

俺は車から降りてその学校を見る
門には文月学園って書いてあった

「入学手続きはしてあるから、今日から頑張つて」

と言って母親は行く

俺は門をくぐるとある先生にあつた

「おはよう。転入生」

俺は心の中で俺が転入生徒分かったと突っ込んだ

「おはようございます。・・・なんとか先生」

「そう言えば自己紹介がまだだったな。俺は西村宗一。生活指導の先生だ」

「なら、俺は高山じゅん。今日から、この学園でお世話になります」
お互い握手をする。すると、後ろから誰かが来る。

「遅いぞ。吉井」

「ゲツ、鉄人。」

その瞬間俺は西村先生のあだ名が分かった気がした

「ほら、お前にだ。」

と言って封筒を渡す

「俺には無いんですか？」
と質問する

「そうだったな。お前にもある」

西村先生は俺にも封筒を渡される

封筒の中身を見ると、Fクラスと書いてあつた

「吉井、お前もFクラスだろ。こいつをFクラスに連れて行ってやれ」

「はぁ、いいですけど、誰なんですか？その子？」

指を刺される

俺は吉井と言う奴にナイフを向ける

「俺は高山じゅん。趣味はナイフで人を脅すこと。理解できました？」

飛びつきりの笑顔で言う

「こら、高山。一応、そいつは観察処分者だ。ここで殺すわけにはいかなんだ。殺したら、大変だ」

西村先生にナイフを没収される

「そうですか。残念です。」

と言って落ち込む

「ほら、吉井こいつを連れて行ってやれ」

「なら、行こうか？高山君」

「吉井、俺の事は親しみをこめて下の名前で呼んでいいよ」

「なら、僕も明久って呼んでもいいよ」

「よろしくな。明久」

「こちらこそ。じゅん」

と言って握手をする

「まだ、そこにいるのか。さっさとFクラスに行け」
西村先生におこられる

「やばい、早く行こう」

と云って学園の中に入る

プロローグ（後書き）

変な所があったら、言っ
て下さいね

主人公紹介（前書き）

物語に入る前に主人公の紹介をしますね

主人公紹介

名 前 高山じゅん

背 丈 雄二と同じくらい

髪 型 後ろを少し伸ばしている。（島田より短い）

髪 の 色 真っ黒

特 徴 メガネをはめていてたまに髪をくくっている。服の至る所にナイフが隠し持っている。腕に黄色のをはめている ブレスレット

学 力 理数系は常に9000点以上

文系は壊滅的

好きな物 甘いもの

嫌いな物 嘘つきな人

家族構成 父と母と下に双子の兄妹がいる（高1）そして長男に俺

能 力 記憶操作

参 考

親がいろんなところに飛び回っている

召喚獣

武器 ナイフ

ナイフの数は総合科目の時は100点に付き1本

普通の科目の時は10点に付き1本

防具 真つ黒いコート

腕輪の効果 完全行動

ナイフが思った所に飛んでいく。

主人公紹介（後書き）

じゅん「所で俺の名前の由来は？」

フレイム「バカテスのアニメを見ていたときに高山つてあったから。それと仁を見ていて間に小ちやい”ゆ”を入れてみたただけだ」

じゅん「それじゃ、じゅんを漢字で書けば。どんな感じ？」

フレイム「潤だよ。次からは物語に入るから」

じゅん「あまり期待するなよ」

文月学園を探検だノ（前書き）

あらすじ。

高山が文月学園に編入した。以上

文月学園を探検だノ

最初に目にしたのはがAクラス

「うわーいい設備。やっぱりAクラスの設備はすごいな」
明久が関心している

「しかも、Aクラス代表は霧島さんか」

「明久、代表とか一体何だ？」

「そうだったね。各クラスに代表がいてクラスで一番頭がいい人が代表をやっているんだ。」

「ふーん。」

と言ってFクラスを目指す

「うそ。ここがFクラス・・・」
見たのはボロい教室だった

「味があつていいじゃん。」
と言って俺が最初に教室に入る

「早く座りやがれウジ虫やろー」
背の高い男に言われる

「誰がウジ虫野郎だ。」
カバンからナイフを取り出して言う

「じゅん。何しているの？」
遅れて明久が入ってくる

「えーと、すまない。ウジ虫野郎はお前の後ろにいる奴に言った」
俺はナイフを戻す

「紹介が遅れた。俺は坂本雄二でFクラスの代表だ」
「高山じゅんだ。親しみをこめて下の名前で呼んでもいいぞ」
と言って坂本握手をする

「えー、そろそろどいてくれませんか？」
後ろにはヨレヨレの先生が立っていた

俺は空いている席につく

「えーFクラス担任の」
と言って黒板に書こうとするがチョークが無い

「福原慎です。一年間よろしく。なら、廊下側から自己紹介をお願いします。」
と言ってみんなに自己紹介をさせる

「ワシは木下秀吉。演劇部に入っておる。よろしくじゃ」
と言うとFクラスの連中は男にも関わらず告白をしている
俺は近くにいた。坂本に話しかける

「おい、坂本何で、木下に告白をしているんだ？あいつは男だろ」
「じゅんか。しょうがないだ。あいつは女みたいに見えるだろ。だからだ」

「へえーそうなんだ」

と言って戻るとすると坂本に止められる

「おいじゅん、質問するがお前は霧島翔子を知っているか？」

「霧島翔子・・・うん覚えている。でも、最後に顔を合わせたのは10年前だしな」

「やっぱりか・・・」

少し考え込む

「翔子がどうかしたのか？」

「いや、俺にお前の話をしていたからな。」

「ほう、俺の話を。」

翔子は俺のことを覚えてくれているのか。嬉しい限りだ。

「でも、それは1年間だけだ。それ以来は一切話を聞いたことが無い。きつと、お前の事を忘れたんだろう」

俺はショックを受けた

「まあ、いいさ。俺は他人の振りをしとくから」と言っ
て席に着く

文月学園を探検だノ（後書き）

フレーム「さてと、続きを書かなければ・・・」

じゅん「まだ、書いていなかったのか？みんなは結構書き溜めをしているとおもぜ」

フレーム「俺は俺のペースで進むの」

じゅん「とりあえず、翔子は俺の事を忘れているのか・・・」

2話（前書き）

あらすじ。説明

雄二にウジ虫やろつと言われ、翔子が俺の事を忘れている？

2話

雄二side

俺は転校生と話した。でも、何かショックを与えてしまったな・・・
そうだ、翔子にメールして覚えているか確かめよう
俺は携帯をとって翔子にメールを流す

『お前。高山じゅんって覚えているか？

From 雄二』

俺は返信を待つ

すると返信が来た

『もちろん。覚えている。でも、いきなりどうしたの？

From 翔子』

俺は少し考えて

『そいつが今日Fクラスに転校してきた。

From 雄二』

これはいざバレルこと、教えても問題ないだろ。
返信が来た

『本当！？嘘じゃないよね。ちょっとまって今すぐそっちに行くから

From 翔子』

俺は携帯をしまった

何か悪いことをしたな。

雄二side out

じゅんside

翔子が俺のことを忘れている。

何かシヨックだな。笑えてきた。

折角、俺は覚えいたのに。向こうは忘れている

そつだ。なら、俺も忘れしまえばいいんだ。

過去の記憶を全て・・・削除してしまえばいいんだ

俺と一緒に遊んだこと別れ際のキスの事を削除していった。

完全に削除されるのは少し時間がかかるがな

じゅんside out

「次、高山君お願いします。」

先生に言われるが俺は座っていた

「大丈夫ですか？。高山君」

心配して先生が近づく

俺は静かに立つ

「大丈夫です。少し眠っていただけです。」

俺は前に行く

「俺は・・・高山じゅん。よろしく」

と俺は簡単に自己紹介をする

すると周りがざわつく

「おい、あいつの目さつきと違うくないか？」

「俺も思った。初めて入った時はいきいきした目だったのに、あの目は・・・死んでいる」

俺が席に着こうとすると。誰かが入ってきた

「・・・雄二。じゅんはどこ」

そこには髪の毛の長い女の子が息を切らせて立っていた

「じゅんなら、そこに」

と言って俺を指を指す

すると、髪の毛の長い女の子は俺に抱きつく

「・・・じゅん。寂しかった」

女の子は泣いている。しかし、俺は突き放した
そして俺はこういった

「あなた、どちら様ですか？」

「・・・嘘でしょ。私の事忘れたの」
慌てている女の子

「そうだ。さっきまで、お前は翔子の事を知っていたんじゃないか」

「何の事でしょう？俺には一切記憶がありません。」
とうとう女の子は崩れ落ちた

「先生、気分が悪くなったんで、保健室行って来ます。」

と言って崩れ落ちた女の子横を通り過ぎて教室から出る

雄二達 side

「ねえ、一体何があったの？それに霧島さんとじゅんの関係って何

？」

明久が聞いてくる

「え〜と、じゅんと翔子は小さい頃からの仲でよく遊んでいたらしい。」

しかし、じゅんの方の都合で10年前転校したらしい。」

「・・・別れるときにキスもしたのに私の事を忘れるなんて」

翔子は泣き始める

「（ハ、ハ）ハア…さっきまで、翔子のことは話していただが。何で急に忘れるんだ」

「そうだ。きっとそこに何か秘密が・・・」

といった瞬間福原先生が雄二を呼ぶ

雄二は福原先生の所に行く

「大丈夫？霧島さん」

「・・・大丈夫。」

すると雄二が帰ってきた

「おい、翔子今すぐじゅんのところに行くぞ」

「・・・何で」

「今なら、間に合うかもしれない。」

と言って手を繋いで雄二と霧島さんは行った

雄二達 side out

じゅん side

俺の記憶を完全削除には時間がかかる

完全削除するまで寝るとするか。

と言って先生に保健室に行くという理由で保健室に行った
じゅん side out

2話（後書き）

翔子「・・・フレイム。じゅんって私のことを忘れたの？」

フレイム「それはどうでしょう。俺の気分で変わるからな」

翔子「・・・もし、記憶が消えてたら。フレイムを家の冷凍庫に入れて保管する」

フレイム「霧島さん。怖いからもう、後書きコーナーに来ないでください」

翔子「・・・それはあなた次第」

3話（前書き）

あらすじ。

翔子の記憶を完全消去しています。

3話

じゅんside

俺の記憶を完全削除には時間がかかる

完全削除するまで寝るとするか。

と言つて先生に保健室に行くという理由で保健室に行った

じゅんsideout

「・・・ねえ、一体どうしたの？」

翔子は走りながら言う

「あいつは記憶を操れる。嫌なことはすぐに忘れられるらしい。

その代わり完全消去には時間がかかるみたいだ。」

「・・・でもなんで、その事？」

「さつき先生から聞いた。記憶を消している時は目が死んでいるらしい

記憶が完全に消えた時普通に戻るらしい。きつかけを作ればその完全削除は戻るらしい」

「・・・私にも希望があるの？」

「きっかけさえ作ればな」

保健室に入る

「あれ？どうかしたんですか？雄二。」

ベツトで寝ようしていた。じゅんがいた

「じゅん、お前に話がある（まだ、目が死んでいる）」

「その顔は俺の特性を聞いたのか。完全消去は残り時間5分持つかどうかだ。どうする？」

すると、翔子は俺の所に来る

「・・・ねえ。本当に忘れたの？私のこと。キスをしたことも楽しかった出来事も忘れたの？」

「忘れたというより。消している。」

雄二はあることに気づく

「（段々、あいつの目が普通に戻ってきている）」

「翔子、早くしないとあいつは完全に記憶が消えるぞ」

すると、女の子は俺にキスをしてくる

「・・・これでも、思いだない？」

俺はいろんな記憶がフィードバックしてくる

「勇sdj k f : i 子k h d s f 不d s j k f j f : 二f k d さj
f k l d s 子 , n f k l h s j l k j x l i o d j k s 吾j k f d
さk l j g 郎u i 身j d s k j g ふあ1祭j i o s d h f l x j v
i o j d s c l : h s o p u j f c i o p j j s o k c j o p d h
o i p j z k s h c j i j v k l k」

俺はかなりというほどの痛みに襲われる

すると、女の子は俺に抱きついてくる

「・・・落ち着いて。私が付いているから。安心して、絶対私は裏切らないから」

と言うと俺は気絶したかのように眠る

「どうなっただ。翔子」

「・・・分からない。でも、私がやることは全てやった。これで記憶が戻らなかつたら、一から新しい記憶を作っていくまで。」

と言って翔子は自分のクラスに戻る

じゅんside

俺は女の子にキスをされた。その瞬間いろんな記憶が蘇る
一緒に遊んだこと、楽しかった。日々が蘇る
そして最後に、小さい女の子が出てくる

「君は誰？」

「私は霧島翔子。過去の私よ」

そう俺に話しかけたのは10年前の霧島だった

「お願い。私の事を忘れないで。」

「分かったよ。でも、起きたときは忘れているかも知れないけど、忘れていたときは一からやり直すだけだよ」

と言って頭を撫でる

俺は目を覚ました

じゅん side out

3話（後書き）

じゅん「微妙なところで終わらせたな」

フレイム「しょうがないだろ。今からこの先を考えるんだから」

じゅん「まあ、頑張って書けや」

フレイム「何かイラつくな・というわけで、次はじゅんが試獣戦争に登場しますお楽しみに」

じゅん「なにそれ美味しいの？」

4話（前書き）

あらすじ。

記憶を完全に消そうとした

4話

保健室で目を覚ました

「失敗したんだ。翔子の記憶は全て覚えている」

時間を見る

16時をさしていた

「マジかよ。あれから、7時間以上寝ていたんだ」

俺は帰るために保健室を出る

教室に帰ろうとすると、知らない奴が俺に何かを言う

「Fクラスだな。勝負だ<サモン>」

「え〜と・・・Fクラスですけど・・・一体何があったの？」
すると呆れられる

「忘れたのか。今、DクラスとFクラスは試獣戦争中だ。勝負しないのか？」

「勝負って言われても・・・どうやってやれば・・・」

「初心者か・・・サモンって言えば召喚獣出てくるから、言ってみ
アドバイスをされてる

「<サモン>」

俺の召喚獣出てくるがすぐに消えた

『Fクラス 高山じゅん
数学 0点』

「戦士者は補習ー」
いきなり西村先生が出てきて俺は連れていかれる

「Why なぜ、俺が」
結局俺は西村先生の補習を受けていた

俺は補習が終わって俺はやっとFクラスに着いた

「じゅん、大丈夫なのか」

「大丈夫じゃない保健室から出て教室に戻ろうとした瞬間なんだよ。
試験召喚戦争って」
俺はぶつぶつ呟いている

「お前、まさか点数は0か？」

「だったよ。それ以前の問題でテストっていうものを一度も受けていない」
と言って教室の端っこでいじける

「それより、やったね。姫路さんDクラス代表を倒すなんて」
明久が誰かに話しかける

「姫路は300点以上は行くからな勝って当然だ。」
と言ってみんな笑う

そこに俺が話に加わる

「ちょっとまで、300点はおかしいだろ。普通は100点までだろ」

俺はおかしい部分を質問する

「この文月学園は点数に上限がないんだ。だから、300点以上あってもおかしくない」と説明してくれる

「次はBクラスだから。その時はお前にも出てもらう」

「わかった。ちなみに、俺の得意教科は理数系で特に苦手とする科目は文系だ」

「へえーうちと同じだね」

ポニーテールの女の子に言われる

「すみませんがどちら様で？」

「自己紹介がまだだったね。うちは島田美波。帰国子女だけど英語は無理です。ドイツから来たから」

「俺は高山じゅん。特技は記憶を操れるところ。喻えを出すなら暗証番号を忘れた時俺に言えば思い出すことが出来る。後忘れさせることも出来る」

明久が俺に向かって

「なら勉強とかを一時的に蘇らせるの？」

「出来るけど下手すれば死を招くことになるけど、それでもいいならしてあげてもいいよ」

要するに成功する確率は50%ということだ
すると、教室に誰かが入ってくる

「ちょっといいかしら」

「どうしたの？秀吉その格好とうとう目覚めたんだね」

「明久よ。ワシはこっちじゃ」
後ろに秀吉がいた

「あれ？それじゃこっちは？」

「多分、木下の姉か妹だろ。顔が似てるということは双子だ。それに話し方も違うし髪どめ位置も違うだろ」

「あら？良くそこまで見抜いたわね。そうよ私は木下優子。2年Aクラスよ」

「その様子だと、宣戦布告に来たという感じか？」

俺は感じたことを言う

「そうよ。明日私たちと戦ってもらうわ」

「いいだろ。その挑戦受けて立つ」

と雄二が言う

「それじゃ、私は帰るわ」

「ちよつと待った。」

俺は木下さんを止める

「まさか、か弱い女に何かするつもり？」

「Aクラス代表の霧島翔子さんに、お前の事は忘れていないと伝えてくれないかな？」

「分かったわ。そう代表に伝えておく
と言って出ていく」

「雄二、今からテストを受けてくるから。先に帰っててくれないかな？」

「分かった。お前気を付けて帰れよ」

と言って雄二たちは帰る

俺は先生たちに訳を言ってテストを受けさせてもらった

4話（後書き）

じゅん「編入してきたから確かに点数は0だな」
フレーム「だね。点数0ってなんか悲しいよね」

5 話（前書き）

あらすじ。

Aクラスに宣戦布告をされた

5話

家に帰ると誰もいなかった

「母さん〜父さん〜いないの〜」

と言って部屋中を探し回る

すると、一枚の紙切れを見つける

【急にアメリカに行くことになったから〜一人暮らし頑張っ
てね〜
Byあなた以外の家族より】

俺はOTLの姿を取る

「マジかよ」

そして文章にはまだ続きがあった

【言い忘れたけど。たまに翔子ちゃんの家族に見てもらっ
つよつに言
っているから〜〜】

「さらなる、マジかよ。どうせ今日来るわけじゃないし・・・」

ピンポン

「・・・まさか」

と言って玄関を開ける

「・・・じゅん、面倒見に来た」

俺は速攻でドアを締めて鍵を締めた

「さうて、眠くなってきたし寝るとするか」

「・・・一緒に寝てあげるね」

なぜか、後ろに翔子がいた

「なぜ。お前が・・・」

鍵を締めたはずなのに家の中に侵入していた

「・・・合鍵を使ったまで・・・」
「と言って合鍵を見せる」

「よっし、それを回収しとこうか。」
「と言って鍵を回収する」

「・・・大丈夫。まだ、2つ作ってあるから。大丈夫」
「と言う翔子」

「はあ、ならこの鍵も返すよ。その代わりに、あまり目立った行動をとるなよ」

「と言って鍵を渡す」

「・・・ありがとう。所でもう寝るの？」

「寝るけど、流石に一緒には寝ませんよ」
「と言うとしょぼんという顔をする」

「それもそうだろ。まだ、恋人にもなっていないんだから。しょう

がないだろ。」

と言つて頭を撫でる

「明日、起こしてくれないかな？俺は朝は苦手なんだ。」

「・・・分かった。（＊´A´＊）」

と言つて家を後にする

じゅん side

翔子が帰つた後俺は風呂に入る。

「今日はいろいろ出来たな〜でも、あそこの学校の学力って意外と低かったな。簡単だったぜ（理数系だけ）」
と言つて風呂を上げる

「明日の試合は楽しいことになりそうですね。」
じゅん side out

俺は風呂上がつて冷蔵庫にあつた。コーヒー牛乳を飲む

「やっぱり、風呂上がりのコーヒー牛乳はうまい」
腰に手を当てながら言う

「・・・ハイトオル」

「ありがとう。助かるよ。翔子」

と言つてタオルを取る

「あれ？いつの間に翔子がいるのかな？」

そこに居たのはさつき返した翔子がいた

「・・・さつき、来た。」

「そうなんだ」ってそういうことじゃない。俺が言いたいのは何で、ここにいるかだ」

「・・・泊まりに来た。」

「親の承諾は？」

「・・・取ってきた」

「着替えは。」

「・・・持ってきている」
くっそ、準備万端かよ

俺はしょうがなく承諾をする

俺は自分の部屋に行き寝ようとする
翔子が俺の後ろに付いてくる

「翔子はちゃんと客間に寝るんだぞ。」

「・・・嫌だ。私はじゅんの部屋で寝る」
俺は少し考える

「翔子は俺の部屋に寝るんだよな」

「……うん」

「よっし、ならお前は俺のベッドで寝ていいぞ」

「……ありがとう。」

と言って翔子は俺のベッドに飛び込む

「……じゅんは寝ないの？」

翔子はベッドの上で待っている。

「残念俺はお前とは寝ると言っていない。という訳で俺は地べたで寝る」

と言って地べたに横になる

その後、翔子は何回も俺にくつつこうとするが俺は回避する

一緒にご飯を食べて一緒に登校をした

朝のAクラス

「何で、あんたたちがいるのよ」

木下姉が言う

そう敵地なのにいるのは先頭に雄二、明久、姫路さん、島田さん、木下君？、最後に俺だった

「いいや。簡単なことだ。俺達も勉強がしたいから、5対5の戦いにしたい」

「それも、そうね。いいよね。代表」

「・・・賭けをしてくれるなら考える」

「一体何だ？」

沈黙が流れて翔子は言う

「・・・勝った方の言う事を絶対聴く事」

「分かった。勝負は今日の午後からそれじゃ」

と言って教室を後にする

Fクラスで作戦会議が行われていた。

「今回は俺は出ない」

雄二は出るそうそう言う

「ちょっと待ってよ。どういうこと？雄二」

「今回の作戦で行くとこれが一番いい。とりあえず、出るメンバーを発表する。」

雄二はメンバーを読み上げていく

1 番木下秀吉

2 番吉井明久

3 番土屋康太

4 番姫路瑞希

5 番高山じゅん

「待ってよ。雄二。ムツツリー二と姫路さんはわかるけど何で秀吉

とか僕とかが最初なのさ？」

「これは、賭けだ。しかしこれで勝てるなら文句は無いよな」

みんなは頷く

「よっし、木下、明久、ムツツリーニ、姫路、じゅん。引き締まって行けよ」

5人は頷く

5 話（後書き）

フレイルム「とりあえず、じゅんが羨ましい。」

じゅん「羨ましいだろ。」

フレイルム「次はAクラスとの戦いだ気を引き締めて行けよ。」

じゅん「大丈夫。問題無い」

フレイルム「頑張ってね」

6 話（前書き）

あらすじ？

Aクラスと戦います

6話

今日の午後、とうとうAクラスとの対決が始まった。

「それでは、Aクラス対Fクラスの対決を始めます。
今回の立会い人は高橋先生、学年主任らしいです。」

「今回は、5対5でいいんですね。」

「「ハイ（・・・ハイ）」」

雄二と翔子が声を合わせて言う

「分かりました。なら、最初の一人をお願いします。」

「頼むぞ。秀吉」

Fクラスからは木下秀吉

「私が行くわ」

Aクラスからはその姉の木下優子

「教科は何にしますか？」

「古典で」

「分かりました。始めてください」

「「サモン」」

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉
古典 349点 49点』

「くっ、やはり勝てんか。なら、姉上これは卑怯かも知れんが、皆の衆聞くが良い。姉上は実はB」

「秀吉、ちよつと話が」

と言つて教室の外に連れて行かれる

「秀吉は何か死亡フラグを立てたみたいだな」
俺は手を合わせる

すると、木下姉が帰ってくる

「秀吉は急用が出来たから帰るってさ。かわりの人出してくれる」

「いいや、こっちの不戦敗でいいっす」

すると高橋先生がパソコンで結果を出す

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉
生命活動 WIN DEAD』

俺達はツツコム余裕は無かった

「それでは二人目の方、どうぞ」

「私が行きます。科目は物理をお願いします」

相手は佐藤さん。

「よし。頼んだぞ、明久」

「分かった」

まあ他の誰かを出すよりは観察処分者で召喚獣の操作に慣れている明久が適任だろう。
生け贄としても………

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

雄二、君はそこまで明久のことを信頼しているんだね。

「ふう………やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

本気？ まさか僕が知らない明久の真の力があるというのか！？

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

「おい、吉井って実は凄いヤツなのか？」

「いや、そんな話は聞いたことはないが」

「いつものジョークだろ？」

「吉井君、でしたか？ あなた、まさか………」

対戦相手の佐藤さんが何かに気づいてしまったかのように戦く。

「あれ、気づいた？」「ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

明久はそう言い終わると袖をまくり、手首を振る。

「それじゃ、あなたは……………」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕……………」

大きく息を吸い……………

「……………左利きなんだ」

言い放った。少しでも期待した僕は何なんだろ……………

『Aクラス	佐藤美穂	V S	Fクラス	吉井明久
物理	389点			62点』

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

「よし。勝負はここからだ」

「ちょっと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかったでしよっ！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

「では、三人目の方どうぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（スック）」

康太が立ち上がる。

「じゃ、ボクが行こうかな」

あ、あれは工藤さん！ 僕の知り合いの中で保健体育が特化して得意なこの二人が戦うなんて。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

自己紹介をする工藤さん。

「教科は何にしますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・保健体育」

Fクラスのリーサルウエポンのムツツリーニこと土屋康太はAクラスの猛者を超えられるのか？

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

さすがにライバル的な位置に存在する康太のことは調べてあるのか。

「でも、ボクだったかなり得意なんだよ？ ・・・・・・・・キミとは違って、実技で、ね」

わあ！ 色々と問題発言！

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えようか？ もちろん実技で」

明久、あんなにときめいた顔をしていたら工藤さんにはれるよな。

「フッ。望むところ。――」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しい顔をしているんだが」

「高山君はどう？」

「・・・愛子それは許さない」

と言って殺気を出す翔子

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。試獣^{サモン}召喚」

「・・・・・・・・・・・・・・・・試獣^{サモン}召喚」

先生のおかげで助かった。

さて、二人の召喚獣は康太がクナイを持った忍者の姿で工藤さんの召喚獣は巨大な斧を持っていて、しかも腕輪まで装備していた。だがそれは康太だって同じ。これはどちらが勝つか解らないんじゃないか？

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

それと同時に康太の召喚獣目掛けてジャンプする工藤さんの召喚獣。するとその召喚獣は異常な速さで降下し、康太の召喚獣目掛けて斧を振る。

「ムツツリーニッ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・加速」

だがその攻撃は空を切るだけで康太の召喚獣には届かない。そしていつの間にか攻撃の射程圏外へ。

「・・・・・・・・え？」

工藤さんの戸惑う顔。

「・・・・・・・・・・・・・・・・加速、終了」

康太がつぶやいた瞬間に工藤さんの召喚獣が倒れた。

『Aクラス	工藤愛子	V S	Fクラス	土屋康太
保健体育	446点			576点』

「そ、そんな・・・・・・・・！ この、ボクが・・・・・・・・！」

膝をつく工藤さん。相当ショックだったんだな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・またいつでも相手になる」

おお。康太が工藤さんに言った言葉は思いの外工藤さんに効いたみたいで。

「次は負けないからね！ ムッツリーニ君！」

その後は何も言わずに戻ってくる康太。
何だか格好良く思えた。

「では四人目の方、どうぞ」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

ここで姫路さんが投入される。体調不良でなければ学年次席の座もとれていたであろう才女だ。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスからは久保利光。現、学年次席だ。

「やはり来たか、学年次席」

「姫路さん。勝てるかな？」

「ここが一番の心配どころだな」

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

久保君が答える。

「ちょっと待った！ 何を勝手に――」

明久がそれを遮る。

「構いません」

「姫路さん？」

明久が心配そうに姫路さんを見ている。

「総合科目は自分の全てが出る科目なんだよ。だから姫路さんはこのFクラスでの全てをここで出し切るつもりなんだ」

「なるほど」

俺が明久と雄二に説明する。

「それでは……」

高橋先生が召喚の承認をする。

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

「Aクラス	久保利光	V S	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	V S	4409点	」

「「4000点オーバー！？」」」

「いつの間にそこまで。」
久保君も驚いている

俺は次のために準備をしている。

「ねえ、じゅん何やっているの？」
明久が聞いてくる

「今？甘いものを食べているだけだよ。食べる？」
と言ってポツキーを差し出す

「うん。食べる」
と言ってポツキーを食べる

明久とポツキーを食べていると勝負の決着が着いた

「勝者、Fクラス姫路瑞希」

これで、勝負がわからなくなった。2対2でイーブン

「最後の人お願いします。」

「・・・私が行く。」

Aクラスからは代表の霧島翔子
周りは「代表対決か」とざわめく

「あの〜かなりというほど、出にくいんですけど〜」
Fクラスからは俺が出ていく

「教科は何にしますか？」

「翔子お前が決めて」
と言つて最後のポッキーを1本を食べる

「・・・総合科目」

Aクラス代表だから学力は最高レベル。果たしてどれくらい取るのか

「始めてください」

「「サモン（・・・サモン）」」

翔子は日本鎧に刀という迫力があつた
俺のはコートを着て登場した

『Aクラス 霧島翔子 VS Fクラス 高山じゅん
総合科目 4582点 7853点』

その場にいた奴らが驚く

「・・・その点数は何？」

「見ての通り俺の実力だけど何か？」

Aクラス代表でも抜くことが出来ない

翔子は刀で攻撃してくるが俺はそれを軽々避ける

「・・・くっ、当たらない」

刀を振り回しているがなかなか当たらない

「翔子。刀は振り回せば当たるというわけではないんだよ」

俺の召喚獣は距離を取る

「・・・動きさえ止められれば。しょうがない（束縛。バインド）」

そうつぶやくと俺の召喚獣は足を固定されたみたいに動けなくなる

「マジかよ。」その技は卑怯だろ”って言うと思う？」

俺の召喚獣はコートの下からナイフを取り出し翔子に向かって投げる

翔子はギリギリ避けるが、次々ナイフは飛んでくる

「腕を固定すれば勝てたのにな」

と言ってナイフを投げ続ける。

すると翔子は避けきれなくなる

そのまま、翔子の召喚獣はハリセンボンのようになった

「勝者、Fクラス 高山じゅん。よって勝者Fクラス」

Fクラスのみんなは喜ぶ。

6 話（後書き）

フレーム「予想外の展開だな」

じゅん「そうか。7000点は普通に越せるだろ？」

フレーム「その内、理数は何点分？」

じゅん「6900点位かな」

フレーム「こいつは文系に弱いと・・・」

じゅん「俺は今から数学の長谷川先生と仲良くなっとくぜ」

フレーム「とりあえず。小説一巻これでおしまい」

6 話目のその後？（前書き）

FクラスがAクラスに勝った

6 話目のその後？

Fクラスが喜んでいるところに行こうと、すると、木下姉がなにやら叫ぶ

「その勝負待った」

俺達は静かになる

「何が不満だ。木下姉」

勝負した本人が出る

「だって、さっきの点数は卑怯でしょ。それに、そんな点数を取るということは、何か卑怯なことに決まっている」

木下姉はいちやもんを付けてきた

「なら、昨日の立会人の高橋先生に聞いてみれば」

と言って高橋先生に降ってみる

「木下さん。そこまで言うなら、これを見てください」

と言って先生はディスプレイに昨日のテストの風景を見せた

「何。このスピード。ありえない」

木下姉が驚いている

「まだ、この点数に文句は無いよな。木下姉」

「くっ、ないわよ。すみませんでした」

俺はくりりと周りFクラスに向かう

「よくやったな。じゅん。お前がMVPだ」

雄二言われる

「MVPとして俺に言う事を言わせてよ」

「分かった。俺達の目的はAクラスの設備を貰えばいいしな」と言っ
て俺に託してくれる

「ありがとう。雄二。なら、Aクラスって先生も入るんですよね。」

「そうですね。一応、私もAクラスの一員ですしね」

「なら、高橋先生。明日、AクラスはBクラスと戦いを設定してください。しかも、模擬試獣戦争ではありません。列記とした。試獣戦争を・・・いいですね。高橋先生」

「霧島さんが承諾してくれるならいいでしょう」

「どうする。翔子。この提案を受けるか？」

「・・・分かった。その提案を受けます。」

俺は翔子の元に行く

「頑張れよ。翔子、期待してるからな」
と言って頭を撫でる

「・・・頑張る。」

「そっか。頑張れよ」

と言ってFクラスに戻る。

「ねえ、じゅんこれでよかったの？」

「何が？」

「さっきの約束さ」

「別にいいじゃん。これはあくまで、5対5の対決方法。普通にしていれば絶対って言うほど勝てなかった。これは、この話に乗ってくれた。Aクラスに対してのお礼だよ」

と言ってAクラスを見る
すると、盛り上がっている

「雄二、お前は本当は翔子に俺達の教室を渡したくなかったんだろ？」

「まあ、本音を言つとな」
雄二は照れながら言う

「明日、これでAクラスが勝てばBクラスの設備になる。一日我慢すればいい話だろ」

「それも、そうだな。よし今日はゲーセンに寄って帰るか」

Fクラスの連中を引き連れて外に出ようとすると、西村先生が立っていた

「丁度良かった。おかえり、わがFクラス諸君」

「鉄人、今なんて言った？」

明久が言う

「もう一回言うおう。我がFクラスの諸君」

すると、Fクラスの連中は大声で叫ぶ

俺は、先生の話を聴きながらポツキ―を食べている

「じゅん、僕にも」

と言って明久が要求する

「しょうがないな。」

と言って明久にポツキ―を渡す

「じゅん、所で何でいつもポツキ―を持っているんだ？」

雄二に聞かれる

「答えは簡単。人間は頭を使うと甘いものが欲しくなるだろ。だからポッキーを食べているだけだよ」

「へえ、そうなんだ。」

と言って俺のポッキーを食べる

「その三人、人の話をちゃんと聞け」

俺と明久と雄二は西村先生に注意される

「ちゃんと聞いていましたよ。簡潔に話すと成績向上アップのためにFクラスに配属されたんでしょ」

「何だ。高山は聞いていたのか。そうだ。とりあえず、高山以外は明日から2時間補習だからな。覚悟しとけよ」

みんながブーイングを漏らす

「先生、何で高山は無いんですか？」

俺の知らない男子生徒が言う

「高山は学年主席以上の実力を持っている。特例として補習無しと決まった」

と言って西村先生は去っていく

「じゅん、今日暇か？」

雄二が聞いてくる

「暇だけどうかしたの？」

「これから、ゲーセンに行こうという話になっているんだが一緒に行かないか？」

「分かった」

と言って俺と雄二は教室を出て行ってゲーセンに行く

6 話目のその後？（後書き）

フレイルム「とりあえず。優子が悪キャラになつたな」

じゅん「今すぐ優子ファンの人に誤ってください」

フレイルム「そうですね。この度は木下優子さんを悪キャラにしてしまつてすみませんでした。」

じゅん「次は雄二とのゲーセンの話ですね。」

フレイルム「それじゃ俺のセリフ・・・」

じゅん「お楽しみに」

休憩

俺と雄二はゲーセンにいる

秀吉は、姉に連れていかれ

土屋は用事があると言って帰ってしまった

明久は姫路達に連れて行かれていった

「とりあえず。何から攻めようか・・・」

と言って俺は周りを見る

「とりあえず。ゲーセンの定番のUFOキャッチャーでもやろうぜ」

雄二はUFOキャッチャーを指さす

中の景品は甘いお菓子の詰め合わせ

「よし。やろう」

と言ってお札をくづしてUFOキャッチャーをやる

何回やってもお菓子は取れない

「下手くそだな。変われ」

と言って雄二がやってみせる。

すると、簡単にとれた

「ほらよ。」

と言ってお菓子を渡される

「ありがとう。」

と言ってお菓子を食べる

「なあ、次はこれをやらないか？」

雄二が指を指したのは太〇の達人

「これは・・・」

俺は疑問に思う

「お前、知らないのか？おっ、前の人がやるからそれをよく見とけ」

前の人は結構うまかった

「ルールはだいたい分かった。よし。雄二やろっ」

と言っ太〇の人をやる

「じゅん。俺にチャンスをくれ」

ただいま。 8連勝中

「これで最後だよ。」

と言って俺もお金を入れる

数分後

「また、負けた」

と言って叫ぶ

「俺は一回見たら忘れない。からな」

と言って笑う

すると、雄二の携帯が鳴った

「母親からか」

と言って電話に出る

俺はジュースを買いにその場を離れる

雄二の分のジュースを持つてすると、明久の姿が見えた。その近くには姫路と島田がいた

「これは雄二に報告しなければ・・・」

俺は雄二の所に行った

「雄二。さっき、明久が島田と姫路とデートしてたぞ」

「それは、本当か!？」

すると、雄二は電話を掛ける

「そうだ。今すぐ明久の監視を頼む決して邪魔をするな。あいつは明日確実に殺すから」

と言って電話を切る

「俺達はどつする?」

「とりあえず、お前は翔子にまかせて俺は帰る」

と言ってダッシュで帰る雄二

「翔子がここにいるわけが無い」

と言って帰ろうとすると、俺の後ろに翔子が立っていた

「・・・じゅん話がある」

「いつの間に・・・」

俺は翔子に連れて行かれる

連れて行かれる事。10分後・・・

翔子は1本の木の下に呼び出す

「俺に何かようなんですか？」

「・・・雄二から全て聞いた」

「どうやら、さっきの電話の相手は翔子だったらしい」

「・・・どうして、私たちを助ける事をしたの？」

「なんでだと思う？」

「・・・分からない。」

「言って首をふる」

「大切な人を汚い教室で勉強させるわけにはいかんやろ」

「・・・大切な人？」

「そう大切な人」

「・・・私があなたの大切な人？」

「そうだよ。最初に来た友達だもんな」
「言って頭を撫でる」

「・・・じゅん、お願いがある。」

「何？翔子」

「・・・じゅん。私と付き合って」
「それは信じられない言葉だった」

「翔子、本当に俺でいいのか？」

「・・・今の私にはじゅんにしか興味が無い。返事は？」
俺は少し考えて答えを出した

「翔子、こんな俺でよければ。」

と言って手を出す

翔子は俺に抱きついてくる

それは、翔子にとって一番の嬉しさだと思った

俺は翔子にキスをする。

少し時間が経って俺は離れる

「・・・ありがとう。じゅん」
と言って笑う

「これから、よろしくな。翔子」
と言う。

「そろそろ出てきたらどうだ？雄二」
俺は隠れている雄二に言った

「何で、バレたんだよ」
雄二は出てくる

「・・・雄二。」

「よかったな。翔子、じゅんと付き合うことになって」

「・・・ありがとう。雄二、今まで私を守ってくれて」と言っ
て雄二に抱きつく

「おい、いいのか。翔子。じゅんの前だぞ」

「照れるなよ。雄二。これは翔子なりのお礼だ。素直に受け取ってやれ」

すると、雄二も観念する

その後、三人で家に帰った

休憩（後書き）

フレイム」とりあえずおめでとつ」

学園祭に入る前に（前書き）

翔子と付き合い事になったそうだ

学園祭に入る前に

家につき俺は自室に行く

すると、俺の携帯が鳴った

「誰だ。って母親から？何だろ。」
と言って電話に出た

『ハロ〜じゅん元気〜』

「何だよ。母さんちやっちゃと用件を言って」

『もうせつかちね〜』

「国際電話だから早めに終わらせて」

『ルリとリクをそっちに転校させるから。面倒をよろしく』

「はあ、転校。何で転校させるんだよ。意味わかんないし」

『ルリとリクは文月学園の一年生になったから後はよろしく〜』
と言って電話をきられた

じゅん side

ちよつと、頭が痛くなる話だ。

ルリとリクは俺の双子の兄妹でよく俺と一緒に行動していた。
リクは良いとしてルリがな〜

頭の隅に残しておこうと思った。
俺は深い眠りに着いた

じゅんsideout

家族side

「お母さんいつになったら、じゅん兄ちゃんの所に行けるの？」

「そうだぜ。早く兄貴に会いたいぜ」

「そうね、向こうではもうすぐ、清涼祭が有るらしいからその時に行くといいわ。」

二人の双子はよろんでいる

「その代わり、向こうではじゅんに迷惑をかけちゃダメよ。特にルリ分かったわね」

「はい。それで、その清涼祭っていつあるの？」

「6月あたりじゃ無かったかしら」

「あと、一ヶ月・・・それまで、リクとお金をたくさん貯めるからと言ってルリが行く」

「俺もかよ。ルリは兄貴の事になるとうるさいからな」
「と言ってリクも行く」

家族sideout

学園祭に入る前に（後書き）

清涼際の予定は適当です

次はルリとリクのプロフィール紹介になります

オリキャラの紹介（前書き）

ルリとリクの紹介です！

オリキャラの紹介

名前 高山リク

背丈 明久と同じくらい

髪型 短髪

髪の色 黒

特徴 赤のブレスレットをはめている

得意科目 文系

苦手科目 理系

好きな物 動物

嫌いな物 ルリと兄貴をいじめるもの

参考

誰にでも明るく接する事が出来て女性にはモテる
よくわる知恵が良くはたらいく
妹思い（シスコンではありません）

召喚獣

武器 赤い刀が一本

防 具 銀の鎧を着ている

腕輪の効果 バーフェクトアタック 完全攻撃

50点消費することによって。攻撃が必ず当たる（1分間）

名 前 高山ルリ

背 丈 葉月より少し高いくらい。胸はDカップ

髪 型 霧島くらい伸ばしている。いつも、ツインテールにしている

髪 の 色 ピンク

特 徴 青のブレスレットをはめている

得意科目 理数と文系

苦手科目 保健体育とかサブ教科

好きな物 リクとじゅん

嫌いな物 男性

参考

男性恐怖症で、引っ込み思案。よくリクかじゅんの後ろに隠れている
一部の男性にはモテる

召喚獣

武 器 青の刀を1本

防 具 金の鎧

腕輪の効果 パーフェクトディフェンス 完全防御

50点消費することによって、全ての出ている召喚獣の攻撃を無効にする（1分間）

オリキャラの紹介（後書き）

フレーム「オリキャラが二人か・・・」

リク「何か問題でもある？」

フレーム「ないけどさ」

ルリ「何か問題でもありますか（涙目＋上目使い）」

フレーム「はい頑張って書かせてもらいます」

7話（前書き）

とりあえず、翔子が恋人になった

7話

桜が葉桜に変わり俺達の生活も変わった

1つは俺に翔子と言う恋人が出来た事

2つは俺以外の人が2時間という補習になっっていること

3つはAクラスの人達がBクラスに勝ってただいま、Bクラスの設備で勉強していることだ・・・

俺達は今Aクラスの設備で勉強している・・・はずもなく俺達は外で野球をしていた

「ところでさ、もうすぐ清涼祭だけど。俺達は出し物を決めなくてもいいのか？」

「そんなのめんどくさいし。まあ適当にやるだけさ」

俺と雄二は話す

ちなみに俺がバッターで雄二はキャッチャーだ。

俺は明久に向かってバットを向ける

「へえゝホームラン予告ね。面白い。その勝負受けて立つ」と言っつて俺に早い球を投げる

「甘い、ストレイトは俺でも打てる」

と言っつて打つ。しかも、明久に向かって

明久の腹にクリーンヒットし、俺は一塁で止まった

「だいじょーぶかゝ明久」

「じゅん、今狙ったでしょ」

明久が俺の所に来る

「雄二俺は一体打つ前に何をした？」

「明久にバットを向けた」

「なら、明久ホームラン予告をしてみろ」
「と言ってバットを渡す」

「こうでしょ。・・・ってあれ？じゅんは僕にバットを向けたでも
本当のホームラン予告は外野に向かって・・・」

「俺は、ただ単なるピッチャー返しをしたまでだ」

「と言って帰らせる」
すると西村先生が走って来る

「やばい、逃げるぞ。みんな」

「と言って走り始める」

その後、全員捕まりクラスに返還された

「はあゝめんどくさいけど、クラスでやること決めまゝす。後はよろしく、島田に明久」
「と言って雄二は自分の机に戻る」

その後、いろんなやり取りがあつてクラスの出し物は中華喫茶に決まった

「中華喫茶つて言う事はチャイナドレスでやるの？」
俺は居眠りをしていたため話を聞いていなかった

「そうだ。今、ムツツリー二に用意させている」
ムツツリー二の方を見るとチャイナドレスを手作りしている姿が見えた

「俺はどうすればいい？」

「お前は料理班に回ってくれ、一応料理出来るだろ。今、明久達が家庭科室にいる。すぐに行ってくれ」

俺は家庭科室に向かう

8話

家庭科室にて・・・

「明久何を作るの？」

家庭科室に着いて近くにいた明久に声を掛ける

「ムツツリー二よると、ゴマ団子と飲茶だけだよ。肉まんとかは別に準備するんだって」

「ふーん。レシピと材料はあるのか？」

「うん。ここにレシピあるよ」

と言ってレシピを見た。

「にしても、土屋もすごいな。かなり丁寧に書いてある」

「きつと、中華喫茶に通い続けてきつと、料理の仕方とチャイナドレスを完璧にマスターしたんだろ」

俺と明久でゴマ団子を作る。

数十分後

「出来たね。たくさん」

「そうだな。作りすぎだな」

そこには、そこにあつた材料を全て作ってしまった

「一個食べて見ようぜ」

と言つて一個俺は食べる
つられて明久も食べる

「うまい。中はモチモチ外はカリカリ」

「甘すぎず。丁度いい味だ」

2人で絶賛する

しかし、かなりというほどたくさんある

「これはクラスで食べてもあまるな」

と思つていと俺はあることを思いつく

「明久、これを先生達に一個ずつ配らないか？」

「何で、家に持ち帰つて食費に・・・」

「西村先生に迷惑を掛けておきながら、差し入れも無しか・・・上手くいけば雑用も少なくなるのにな」

と言つと明久は渋渋承諾する

その後、先生たちに配つて周り、ついでにまた、食べにくるよう仕向けながら作ってしまったゴマ団子が0個になった

クラスに帰ると雄二と秀吉が倒れ込んでいた

「どうかしたの？雄二、秀吉！？」

慌てて2人の元に駆け寄る

すると、土屋が俺の所に来て事情を話す

「なるほど、姫路の料理を食べてこうなったと」

「コクコク」

「あと何個残っているんだ」

「・・・後一個」

と言って指を指す

「明久、そこにある。ゴマ団子お前のらしいから食べといてくれ」

と言って明久に姫路の料理を食べさせる

「うゝん。外はゴリゴリ、中はネバネバ、甘すぎずからすぎず辛すぎないところがまたいいゴツパ」

と言って倒れる

俺はすぐに明久に近づきさつき食べたゴマ団子の記憶を全て消した

「あれ？一体僕は何をしてたの？」

意識も戻り平然に俺に尋ねる

「お前、お腹が空きすぎて倒れたんだよ。」

と言ってポツキーを渡す

「そうなんだ」

と言って渡されたポツキーを食べる

その後、雄二と秀吉の記憶をけしてあげた

その後みんなで力を合わせて準備に取り掛かっていた

8 話（後書き）

じゅん「姫路の料理。マジで怖い」

土屋「確かに。」

じゅん「土屋。姫路が料理を持ってきたら俺たちだけで逃げるぞ」
土屋「了解」

ここにすごい絆が生まれた

9 話

放課後

俺は珍しく一人で行動している

何せ、翔子は雄二達に話があるとかで雄二たち一緒にいた

「今日の晩ご飯は何にしようかな」

と言って商店街に行く

翔子達 side

「・・・雄二話がある」

Fクラスに入る早々雄二達にそう告げる

「翔子どうかしたのか？じゅんならもう帰ったぞ」

「・・・知っている。雄二達に大切な話があるの。真面目に聞いてね」

その場にいた俺を抜かしたメンバーが息を飲む

「・・・実はじゅんが転校してしまうかもしれないの」

するとみんな驚いた

「嘘だろ。じゅんが転校何て」

「そうだよ。じゅんが転校何て考えられないよ」

と言ってみんなが言い始める

「・・・私も信じられない。だから、みんなに協力して欲しい」

するとみんな真剣になる

「・・・清涼祭にある。イベントでFクラスはすごいクラスだとアピールして欲しい」

「それも、そうだな。でも、誰がイベントに出る？」

「・・・それなら、私とじゅんで出る。あと、雄二と吉井が出てくれればいい」

「翔子、じゅんが転校って本当なんだよな。」

「・・・うん、この耳で聞いた」

するとみんな立ち上がり

「よっし、ならみんなで清涼祭を盛り上げていくぞ」

雄二たちはじゅんを転校させないために頑張ろうとしていた

翔子達 side out

その次の日

俺は翔子に呼び出された

「どうかしたの？翔子」

「・・・じゅん、私と一緒に試獣召喚大会に出て
上目使いと＋涙目で言われる

「試獣召喚大会？それって、要するに召喚獣が使えるの？」

「・・・そう。商品が如月グランドパークの招待券、それと日光の
腕輪と月光の腕輪の3つ」

「面白そうだな。よっし、俺と一緒に出ようぜ。翔子」
言つと翔子も頷く

「なら、一緒に先生に選手登録をしないこうぜ」
俺は翔子の手をつなぎ職員室に向かう

ここに、2年生最強コンビが誕生した

その後みんなで最後に向けてのラストスパートをかけていた

そのころ、空港ではある人物が降り立った

「ルリ早くしろよ。ホテルに間に合わないだろ」

「ちよつちよとまってよ。リク早すぎるよ」

リクはルリに対して呆れている

「ところでさ。何で、家があるのにホテルにしたの？」

ルリはリクに尋ねる

「いや、清涼祭で兄貴を驚かせたいじゃん」

「なるほど、リクも悪だね」分かった。それじゃ、明日に向けて早く寝よう。ほら行くよ。リク」

ルリは進んでいく

俺はくしゃみをした

「今誰かが俺の噂をしたのか？」

「さあ？霧島さんがしたんじゃないの」

明久に言われて作業に戻る

9 話（後書き）

フレーム「早く、強化合宿を書きたい」

10話

そして、清涼祭当日

「いらっしゃいませ〜ようこそヨーロッパへ」

女子メンバー＋秀吉が接客をする

明久と土屋と坂本は俺は料理をしている

残りは途中抜ける時に変わるだけだ。大体は宣伝に行かせている

「じゅん、そろそろ僕たち時間だから行くね」

と言って雄二と明久が抜ける

「土屋、俺もそろそろ、時間だから行くね」

と言って俺も抜ける

途中、霧島と出会って会場に行く

「それでは一回戦を始めます。3回戦までは観客には見せないの
で安心してください」

と言う高橋先生

相手はEクラスの人2人だった

「うわ、Aクラスの代表だ。」

「相手が悪かったね。」

と言って向こうは諦めモードだった

「一応初めてください」

と言ってフィールドを出す

「『『『サモン』』』」

『Aクラス 霧島翔子 & Fクラス 高山じゅん	VS	Eクラ
ス 花村涼子 & Eクラス 木村竜次		
古典	402点	22点
0点		9
	81点	『

「翔子後は任せた」

「・・・うん。任された」

俺は隣の試合を見た

隣では明久と雄二のペアだった。

「相手は、Bクラスの連中か。勝てるか微妙だな」
と言って明久と雄二の点数を見る

『Fクラス	坂本雄二 & Fクラス	吉井明久
数学	179点	68点

「なあ、翔子何で向こうは数学なんだ？」

翔子は最後の一人を倒して俺に言う

「・・・向こうはAブロック。AブロックとBブロックの教科はラ
ンダムで決まるから。今回はたまたま。行こう」

と言ってその場を後にする

11話

俺は相変わらず。ゴマ団子を作ったり飲茶を作っている
すると、やっぱりこういう奴らはいた

「責任者だせ」

野太い声が聞こえた

俺は手が空いたからホールに向かった

「お前が責任者か」

俺は無言でその前に立つ

「お客様、何が不満なんでしょうか？」

「俺の相方の常村がこのゴマ団子を食べて気絶したんだが・・・」

と言って俺にゴマ団子を見せる

俺は深いため息をして話を始める

「先輩たちこのゴマ団子はサンプルで作った物です。形を良く見せるために普通の材料は使っておりません」

「なっ、なんだと!？」

「まさかと思うけど、ワザとサンプルを食べて食い逃げを図ろうとしたんじゃないでしょうね」

すると、周りがざわつく

「マジかよ。それは無いだろ。」

「って言うかあいつら3年だろ手際が良かった所を見ると何回もやっているな」

すると常村が起きた

「おい、夏川どうなったんだ」

「さて、あなたたちに味方は居なくなりました。どうしますか？」

俺はさらに二人を追い詰める

「に、逃げるぞ。常村」

「そ、そうだな。夏村」

慌てて教室を出ていく

「皆さん、どうも、すみませんでした。それと、くれぐれもサンプルには手をださないで下さい。」

と言ってホールを後にする

俺は時計を見ると後、5分で次の試合が始まりそうだった

「やばい。やばい。秀吉、試合があるから行ってくるな」

と言に残し俺は教室を飛び出す
翔子はもうステージにいた
対戦相手もいた

「先生、セーフ？」
と言う

「ギリギリセーフです。とりあえずステージに上がって下さい」
俺はステージに上がる

「・・・じゅんどうしたの？ギリギリ何て」

「店の妨害を処理していた。すまないな遅れて」

と言って対戦相手を見る

そこには久保と清水がいた

「また、これは面白いコンビだ」

「「気にするな」」

「それでは、初めて下さい」
と言って先生は始めさせる

今回の教科は化学

「「「サモン」」」

『Aクラス 霧島翔子 & Fクラス 高山じゅん VS Aクラ

ス	久保利光 & Dクラス	清水美春	
化学	392点	702点	3
85点	132点		

その場にいた奴らは驚いている

「えーと、先生この点数ってありですか？」
久保はメガネをあげて言う

「えーと、一応有りです。」

「翔子ここは俺にまかせてくれ。」
と言って二人の前に立つ

「舐めるではありません。お姉さまとデートするためにはこつする
しかなかったんです」
と言って清水は俺に突っ込んでくる

「甘いな」
と言って避ける

俺の召喚獣はナイフを出して清水に投げる
それは、久保によって阻止される

「君の召喚獣の攻撃は武器に当たっても点数は減らない。」
また、メガネをあげて言う

「あっそう、これは、避ける事が出来るでしょうか」
と言って手に持てる30本ぐらい持つ。そして、俺の腕輪の効果も
使う

「無駄って言っているのに」

と言っ て俺が投げたナイフを全て薙ぎ払う

「人はちゃんと勉強するもんだよ」

と言っ と薙ぎ払われたナイフは久保に向かってまた飛んでいく。

「そ、そんな。何故？」

「俺の腕輪の効果は完全行動ナイフを自由自在に動かせる事が出来るんだよ」
パーフェクトパターン

と言っ て一本のナイフを上に向かって投げ清水にヒットさせる
二人の点数が0になり決着が着いた

「それじゃ、行きましょうか。翔子」

と言っ て俺達はその場を後にする

明久達はBとCクラスの代表だったらしいがBクラスの弱み？を握
っていたらしく向こうの棄権らしい

11話（後書き）

やっと、腕輪の効果が使えたぜ

12話くらい

教室に戻るとそこにはお客さん一人もいなかった

「なあ、なんでお客さんがいないの？」

Fクラスにはお客が一人としていなかった

「ああ、何かがおかしい」

雄二がつぶやく
するとお客が入ってきた

「あつ、お姉ちゃん」

と言って島田の方に向かって行き抱きつく
すると、明久は気づかれないように俺に近づく

「ねえ、じゅん、僕あの子にあった事があるんだ。だから、じゅんの力で記憶を蘇らせてよ」

と言う

「分かった、少し離れようか」

と言って教室の死角に移動する

俺は明久の頭に手を置く

少しして明久は記憶を思い出す

「ありがとう。あの子の事を思い出したよ」

と言って島田妹の所に行く

「久しぶりだね。葉月ちゃん」

「あつ、バカなお兄ちゃん」

と言って明久につつこんで行く
すると、またお客が入ってくる

「あつ、早速、兄貴発見」

「お兄様・・・」

そう言ってその二人は俺に抱きついてくる

「おい、じゅんそいつら知り合いか？」

雄二が聞いてくる

「一応な、ほら、2人とも離れろ、それと翔子も出てこいよ」

と言うと隠れていた翔子が出てきた

「・・・じゅん浮気は許さない」

翔子は俺に殺気を出している

「ほら、お前らみんなに自己紹介をしろ」

と言って2人に自己紹介をするようにうながす

「俺は高山リク。」

「私は高山ルリ。」

と言うと翔子と雄二も自己紹介をする

「見ての通り俺の双子の兄弟だ。今度、この学校に転校してくる」

「よろしくね」

と言うと翔子は俺に近づく

「ねえ、それじゃ、じゅんは転校しないの？」

俺は言葉を失った

「何言っているんだ。俺がいつ転校するって言った？」

「・・・だって。電話で・・・」

「あの時かあれはこの二人が転校するという話をしていたんだ。」

すると雄二はあぜんとする

「それじゃ、じゅんが転校するって・・・翔子の勘違い？」

「まあ、そういうことになるな」

と言うと翔子は真っ赤になっている

「所で、何で俺に黙って日本に来たのかな」
俺はリクに言う

「え〜と・・・そ、それは・・・」
目が泳いでいる。

「リクが話せないようだから、ルリに聞くとするか」
と言ってルリにふる

「それは・・・リクがお兄様を驚かせようとして・・・」
と言ってリクを見る

「あつ、こらルリ人のせいにするな」
俺はあきれる

「まっ、どっちみちいいや、とにかく無事で何よりだよ」
と言って2人の頭を撫でる

「お兄様、さつきから気になっていたんですけど・・・その人は？」
といってルリは翔子を指さす

「俺の彼女の霧島翔子だ。」
と言うとルリは驚く

「なら、お姉さまだ・・・」
と言って翔子の手を取る

「・・・じゅん、これはどどういう状況？」

「ルリは気に入っているだよ。（本当は俺が彼女を作らないからこ
ういうオチになっているダケだけな）」

「所で、翔子俺に何か用か？」

俺は翔子に言う

「・・・そうだった。実は私たちのクラスでFクラスの営業妨害が
合っているの」

すると、雄二はその言葉に反応する

「翔子それは本当か」

「・・・うん。」

俺はこのクラスの妨害を思い出す

「翔子それって3年生の男子2人組じゃなかったか？」

「・・・うん、その二人だと思う」

「雄二、多分そいつらはここで営業妨害をしていた奴ラだ」

「そうか、さつき恥ずかしられたからそのお返しか・・・」

すると、雄二たちはAクラスに行こうとする

「雄二俺はあいつらに顔を知られている。だから俺は行かない」

すると、みんな、驚いた顔をしている

「当たり前だろ、俺は顔を見られる」

「・・・私たちのクラスに来てくれないの？」

「大丈夫。常夏コンビが消えたら来るから」

と言ってリルとルリを見送る

すると土屋が近づいてきた

「・・・じゅん、あの妹のチャイナドレス作ってもいいか？」

「ルリの別にいいけど。まさか手伝いをさせる気か？」

「コクコクコク」

俺は少し考える

「いいよ。その代わりに、男性用の中華服を作れるか？」

「・・・それをどうするつもり？」

「リクに着させる。ルリだけに着させるのも何だろ。それにルリは男性恐怖症なんだ。ボディガードついでにいいだろ。」

と言って俺は厨房に行く

12話くらい（後書き）

やっと兄妹を出せた。

そしてとてもというほど眠いです。誰か助けてください

13話？（前書き）

最近眠気が止まらない

13話？

数十分後

Fクラスの前に人影が通る

頭に耳みたいのをつけている

俺はこそつと出てその光景を携帯の写メで取る

「そろそろ、時間だから行くね」

と言って教室を出ていく

今回の相手は姫路、島田ペアだ

「次の相手は島田と姫路か・・・」

俺はつぶやく

「あの～パートナーは？」

姫路が言う

「翔子はまだ来てみないだな。それと教科が決まったぞ」

と言ってディスプレイを見る

「世界史だ～良かった古典だったらうち絶対負けているもん」

すると、翔子が遅れてきた

「・・・おまたせ」

これで全員揃った

「それでは、始めてください」

「」「」「サモン」「」

『Aクラス	霧島翔子	& Fクラス	高山じゅん	V S	Fクラス
姫路瑞希	& Fクラス	島田美波			
世界史	4 1 2 点				4
0 3 点		1 0 9 点			

俺の点数が表示されない

そして、俺の召喚獣も出ていない

「先生、何で俺の点数が表示されないんですか？」

すると、先生は携帯で誰かと話している

「すみません。もう少し待ってくださいませんか？まだ、あなたのテストが採点が終わっていません。だから少し待って下さい」

「・・・じゅん、まさか今日はどんだけ問いたの？」

「さあ？あまり覚えていない」

「確か、高山君って理数系が得意なんですよね？」

「そうね。ウチと同じなんだよね」

「確かに理数系も得意だよ。でも、俺は記憶力がいいからな。それに俺は両利きだから両方の手で解かせて貰ったよ」

すると、俺の点数がやっと表示された

『Fクラス 高山じゅん
世界史 2014点』

「「まさかの、2000点オーバー!?!」」

準決勝じゃ無いから良かったと思った

「それじゃ、始めましょうか？」

俺はナイフを一本持つ

「・・・じゅん、私は邪魔？」

翔子が聞いてくる

「いや。翔子と俺は最強のペアだ。面白いことをしてみようぜ」

と言って翔子に耳打ちをする

「・・・分かった。やってみる」

と言って翔子は俺の後ろに隠れる

「何をしたのかわかりませんが美波ちゃん」

「分かった。瑞希」

と言ってコンビネーションで攻めてくる

「翔子、今だ」

すると、姫路の動きが止まる

「私の召喚獣が動きません」

「……束縛」
バインド

俺は翔子の腕輪の効果を使って姫路の動きを止めさせる

「そして、俺の腕輪の効果で止め」

俺は完全行動で姫路を針千本みたいにする

「そんな」

姫路が崩れ落ちる

「油断していると足元をすくわれるぞ。島田」

油断したせいで島田は俺にかなりというほど近づかせていた

「See You」

俺は島田をナイフで切りつけた

「勝者Aクラス 霧島、高山ペア」

俺と翔子はハイタッチをした

「だから言ったる。俺達是最強ペアだから、負けなしって」

「・・・うん。ありがとうね」

俺達はステージを後にする

14話くらいじゃないの？(前書き)

今回はクオリティが低いと思いました

14話くらいじゃないの？

俺はFクラスに戻らず他のクラスに行く
最初にEクラスに行く

Eクラスはスポーツメンバーが多いからスポーツで勝負？みたいな
感じだった

「あなた、Fクラスの高山君ですよね」

誰かが話しかけてくる

「そうですけど。何か用？」

「私はEクラス代表の中林よ。よろしく」

「高山だ。所でここではどんなことをしているの？」

「ここでは、いろんな種目のスポーツがあり、それぞれエースが待ち構えています。もし、そのエースを勝てば1000円貰えます。その代わり、負けたら1000円を頂戴します。」

要するに賭けゲームだ

「先生がよく許可したな」

「それだけ、私たちを信頼してくれているからね」

俺は種目表を見た

野球は3球勝負。サッカーはPK。テニスはワンゲーム性。

流石にチームでやるのはほとんどなかった

俺は野球とサッカーとボクシングを選択した

野球はピッチャーとバッターが選択出来る

エースは藤宮君だった

「次のチャレンジャーは君か。僕は藤宮だよろしく」

「よろしく所で今何人抜きしているの？」

「9人だ。お前を倒せば10人目になる」

俺はバッターを指定する

「ちなみに、僕はフォークとカーブを得意とする。どっちがいい？」

「なら、フォークとカーブとストレートがいいです。」

「その順番でいいのかい？」

「はい。いいですよ」

俺は投げて来たボールを全てホームランボールにした

「そんな、僕のボールを全て打たれるなんて」

藤宮はOTLのポーズを取っている

その後、残り2つの種目も全て勝った

俺はそのうちの2000円をEクラス代表に返した

俺は時計を見る

「やばい。そろそろ、戻らないと」

俺はEクラスで遊びすぎていた。流石に戻らないとみんなに怒られそうだな

俺はFクラスに戻る

するとそこはお客が溢れていた

「こりやまた。すごいな」

「あつ、やっと帰ってきた。じゅん、今までどこに行ってたの?」

明久言う

「ちょっと、遊んでたwww」

「それより、ゴマ団子がそろそろ切れかかっているんだ。作るの手伝ってよ」

まあ、今だけお客がいれば

「分かった。今そっちに行く」

俺は料理場に行く

明久と俺がゴマ団子を作る

「所で、お前たちは3回戦は勝ち上がったのか？」

「うん、勝ち上がったよ。でも、じゅん達とぶつかるのは決勝戦だ」

「ちゃんと勝ち上がって来いよ」

俺は無言になりゴマ団子を作る

数十分後・・・

「・・・じゅん、そろそろ行こう」

俺は夢中になったせいか時間を忘れていた

「もうそんな時間か。なら準決勝に行こうとするか」

俺達は準決勝に行く

今回の対戦相手はよく知っている人間だった

「あつ、お前は」

向こうにいたのは常夏コンビだった

「ほう、3年の常夏コンビだ」

「誰が常夏だ」

「だって、そっちが常村、もう一人が夏川だろ。だから頭文字をとって常夏」

「といって親指を立てる

「そろそろ、始めてください」

と言われる

今回は数学。俺の得意教科だ

「待ってな。俺の得意な数学で倒してやる」

「へえ、奇遇ですね。実は俺も数学は得意なんですよ」

と言って召喚獣を召喚する

「『『『サモン』『』『』」

『Aクラス 霧島翔子 & Fクラス 高山じゅん VS Aクラス
常村勇作 & Aクラス 夏川俊平

数学 381点

398点 408点『

また、俺の点数が出てこない

「先生、またですか？」

3年の二人が俺を馬鹿にしてくる

「お前の点数が出てこないと言う事はお前まさか0点じゃ無いのか？」

「しょうがないぜ。所詮こいつはFクラス何だから絶対俺達は勝てるぜ」

笑われる

翔子は悔しがる素振りを見せる

「翔子言わせておけ。どうせ、前の俺の試合を見てないだけだ。今回は観客有りだ。あいつらを辱める」

俺は（ー、ー）ニヤリと笑う

「お待たせしました。今、採点が終わりました」と言う

『Fクラス 高山じゅん

数学 1535点』

「さて、先輩たちFクラスの俺は倒せるんですよ。始めましょうか」

俺の召喚獣はナイフを常備する

「い、いくら1500点以上だってまだ、召喚獣はそんなに扱って

いないだろ」

と言って突っ込んでくる

今回は翔子の腕輪が使えない。

「翔子、常村と戦ってくれ。俺は夏川を相手をする」

と言って一対一の体制を取る

俺は任せるときに翔子背中に俺のナイフをこっそり滑り込ませる

「・・・じゅん、今何やった？」

小声で聞いてくる

「お前の召喚獣にピアノ線付きのナイフを滑り込ませた。出来ればかなり動いてもらえれば助かる」

「・・・分かった。」

翔子はかなり動き回ってくれてる

「さて、夏川先輩始めましょうか」

俺は夏川先輩に向けてナイフを投げる

しかし、夏川先輩は避ける。それも簡単に

「お前とは違って結構動かしているんだよ。」

と言って俺にかなり近づいてくる

俺はギリギリの角度でよけた

そして、夏川から距離を取る

「なかなかやりますね。でも、もう常村先輩は動きそうにないですね」

「すまない。夏川俺は動けそうにない」

常村は見えない糸で拘束されていた

「どういうことだ。てめえ何をした」

「さっき、投げたナイフにはピアノ線が付いているんだ。」

「まさか、計算して投げたというのか」

夏川は驚いている

「まあ、そういうことになるな。翔子も頑張ってくれたみたいだしな」

「それじゃ、先輩も拘束してあげましょうか？」

と言ってナイフを見せる

「くっ、くっそー」

と言ってデタラメに攻撃をしてくる

「だから、甘いんだよバーカ」

俺は夏川を倒した

「翔子、そっちも倒してもらって構わないぞ」

「・・・分かった」

と言って動かない常村に止めを指す

「勝者、霧島、高山ペア」

俺は常夏の前に立つ

「残念でしたね。次はここを使って下さいね。」

常夏コンビは言い返すセリフは無かった

「・・・じゅん、決勝は明日だから帰ろ」

「それもそうだな。」

俺と翔子はその場を後にする

ちよつとした。 雑談（前書き）

ちよつと、ネタが思いつかないからちよつと休憩

ちよつとした。雑談

第一回、主人公を分析してみよう

フレイム「という訳で始めました。主人公を分析してみよう。司会は俺、フレイムとサブとしてバカテスの主人公、バカの代名詞の吉井明久君でゝす」

明久「初対面でいきなりバカ扱い！？」

フレイム「だってバカだろ？今に始まったことじゃないし。そしてゲストとしてよく知っている・・・ルリとリク君です」

リク&ルリ「どうも」

明久「所で、何を分析するの？」

フレイム「それはこれだ！」

と言って机を叩く。すると下から何かが出てくる

~~~~~主人公の弱点について~~~~~

明久「じゅんの弱点・・・たしかに完璧人だからそれは気にあるな

」

フレーム「俺は答えを知っているからみんなで話し合ってみよう」

フレームはお茶を飲み始めた

ルリ「司会放棄したね。」

リク「そうだね。とにかく弱点と言うことは苦手な物か・・・」

明久「僕の予想は意外な所で犬とか？」

ルリ「あつ、それは私の苦手な物です」

リク「ちなみに兄貴は猫と犬は苦手じゃないぜ」

という訳で、動物はなしと

明久「だったら、食べ物関係では？」

ルリ「確か・・・いつも納豆を出すといつ残していますよ」

明久「だったら。納豆が弱点か!？」

フレーム「違うぞ。これを見る」

と言ってディスプレイを出す

ルリ「これは私たちの食事の時だね。」

リク「あつ、納豆も出てる。でも、兄貴は納豆取って何かを見てい

る」

明久「美味しそうだな〜うう、お腹すいてきた。」

ルリ「今度、どうですか？家に遊びに来ます？」

明久「来るよ。絶対来る」

ルリ「その代わり雄二さんと一緒ならいいですよ」

明久とルリが盛り上がっている

リク「所で何を見せたいんだ？フレイムさんよ？」

フレイム「ほれ、この納豆を見る。賞味期限が切れている」

リク「あつ、本当だ。」

フレイム「そして、このあとも大事だぞ」

食べ終わりじゅんは席を立つ。ルリはその納豆を冷蔵庫に直している。

リク「それじゃ、別に兄貴は納豆が苦手じゃなくて賞味期限が切れているから食べないだけ？」

フレイム「そういうことだ。こうしても答えがでなさそうだから、ヒントをあげるよ。」

リク「ヒント？」

フレイム「苦手な物は女子は大体苦手、あと一つは仲間があれするかな？」

リク「女子が苦手なものか・・・ルリに聞けばいいか」

ルリと明久は相変わらずしゃべっている

リク「あいつらはダメだ考えないと・・・」

リクは一生懸命考えている

ルリ「リク一体何について考えているの？」

明久「そうだよ。難しい顔をして」

リク「お前ら、最初の目的を忘れているぞ」

リクは怒鳴った。

ルリ「そういえば、納豆はどうなったの？」

リク「お前が原因ということで理解したよ」

ルリは？と言うマークを出しているが

リク「とりあえず、お前の嫌いなものは？」

ルリ「昆虫特にカマキリ」

フレイム「正解だ。じゅんはカマキリが苦手なんだ。あれは怖いよ。顔も気持ち悪いし」

リク「なんだ。そういうことなんだ」

フレイム「それじゃ、そろそろ締めるとしますか。司会はフレイムと」

明久「サブの吉井明久と」

ルリ「ゲストのルリと」

リク「リクでした。」

フレイム「それじゃ、また会いましょう」

結論

- じゅんの弱点 —
- 昆虫系 —
- 仲間に裏切られること —
- 長話。 —

おまけ  
じゅんの身体能力は  
攻撃力 A  
スピード S

スタミナ B  
防御 S  
状況判断 SSS  
動体視力 S  
反射 A

まあ強すぎたということだ

フレ임「これは、めだかから持ってきた。」

リク「それでいいのか・・・」

フレ임「そうだね。その内、力を絞りに行くとするか」

### 反省会

今、4人は正座をしている

神「何か言う事は？」

フレ임「強いて言うならなぜ俺たちは正座をしているんですか？」

神「それは、今回の小説がグダグダ過ぎたからだ。しかし、リクはちゃんとやっていたから正座は辞めていいぞ」

リクは正座をやめた

神「まず、反省点をあげよ」

フレ임「まあ、俺は特に無いかな？」

明久「僕もないと思うよ」

ルリ「私も」

神「おおありじゃー。まずはフレ임、いくら答えを知っているからって適当にするな」

フレ임「だって、めんどいもん」

神「ルリと明久。お前らはちゃんと質問について考えろ」なに料理の話をしているんだ」

明久「だってお腹空いていて話が盛り上がった」

ルリ「だって、料理出来るって聞いたから」

神「という訳で給料は、なしだ」

3人「それでも神様か」

リク「まあ仕事をしていないということではしょうがないんじゃないの？それじゃ皆さんまた合つ日までさよなら」

リクが最後に締めた

## 15話だっけ

Fクラスに戻ると俺は驚愕した

そこにはリクしかいなかった

「リク、他のメンバーはどうした」

「兄貴、大変なんだよ。女子メンバーがさらわれたんだよ」

すると、明久達も戻ってきた

「これはどういう状況なの？」

「どうやら、女子メンバーがさらわれたらしい」

明久たちもパニックになる

「……………吉井」

ムツツリーニが来た

「ムツツリーニ大変だよ」

「……………知っている。場所まで特定できた。」

「「さっすが」ムツツリーニ」」

「場所はどこだ」

「・・・・・・・・近くのカラオケ店」

俺と雄二と明久とムツツリー二と一緒にカラオケ店に行く

俺と土屋は左の部屋。雄二と明久は右の部屋で待機している。

ちなみに、リクはFクラスで店番だwww

「どんなタイミングで行く？」

「・・・・・・・・俺がタイミングを出す」

そう言つて土屋は部屋を出ていく

すると、土屋が例の部屋に入つていった

「・・・・・・・・灰皿を換えに来ました」

すると、不良の声が聞こえる

「ところでこのオネーチャンたちどうする？ やっちゃっていいの？」

「だったら俺はこの巨乳チャンがいいなー！」

「あつ！ズリー！それなら俺二番ね！」

「あ、あのつ！葉月ちゃんを話して、私たちを帰らせて下さい！」

「だってさ。どうする？」

「それはオネーチャンの頑張り次第だよな？」

「やつ！ さ、触らないでー」

「ちょっと、やめなさいよ！」

すると、でかい物音が聞こえる

「じゅん、明久が行ってしまった」

雄二から連絡が来る

「しょうがない。俺達も行くぞ」

俺と雄二も遅れていく

扉を開けると明久が「僕の大切な人に触るな」と言っていた

「さてと、明久助けに来たぜ。」

雄二が言う

「ゲッ、あれは阿修羅の坂本じゃ・・・」

不良共は逃げようとする。

「残念だよ。君たちには」

俺はそのうちの一人に近づき気絶させた

「なんだ。お前ら一体何ものだ」

「俺はお前らが誘拐した人たちの仲間だよ」

女子は土屋にまかせて俺と雄二と明久でフルボッコにする

数分後・・・

「やったね。雄二」

「ああ、さて、こいつらをどうするか・・・」

明久と雄二でほとんど倒してた

「そうだ。じゅん、こいつらの記憶って全て消せる？」

「出来るよ。」

明久は俺に耳打ちをする

「はぁ・・・よくそんな悪知恵が働くな」

俺は不良の頭に手を置いた。そして、全ての記憶を消し去った

その後、明久は不良の服を全て脱がした

俺達は速攻でその場を退散する

その後、警察が来てその不良組は逮捕された



16だよ・・・きつと

その日の放課後

俺は翔子とルリとリクと一緒に帰っている

「兄貴、今日久々勝負しない？」

「いいけど。あれは持つてきているのか？」

「当たり前だぜ」

俺はリクと話している

「・・・ルリちゃん。勝負つて何？」

「えーと。リクとお兄様はチャンバラが好きなんです。」

「・・・そうなんだ。」

「所でお姉様。お兄様とはどこまでされたんですか？」

「・・・それは／＼／」

翔子の顔が真っ赤になる

家に着き翔子も泊まらせるよう言う

「・・・分かった。着替えとか持つてくる」

翔子は一旦自分の家に戻る

「それじゃ、リク準備は出来たか？」

「ああ、出来たぜ。近くの公園に行こうぜ」

「そのつもりだ。ルリも行くか？」

「お姉さまが帰ってくるかもしれないから。家でお留守番しとく。あまり無理しないでね」

と言って手をふる

近くの公園にて

「それじゃ、始めようか。兄貴」

と言って俺に木刀を渡す

「時間無制限の一本とった方の勝ちな」

俺は裸足になる

「分かった。いつでもきな」

と言ってリクは挑発をする

「いつも、俺からだからたまにはお前から来いよ」

すると、リクは俺に攻撃してくる

その瞬間、小さい動きで避ける。何回も攻撃してくる

「兄貴にしては珍しいな。反撃してこないって」

「そうか、今のお前の攻撃は完全と言っていいほど避ける事が出来るからな」

すると、リクは怒涛な攻撃をしてくる

しかし、俺はそれを避ける

「はあはあ、何で当たんだよ」

「では、そろそろ、攻守交代と行こうか」

と言って今度は俺が攻める

リクは避ける仕草を見せるが残念ながら体力切れだ

「一本」

と言ってリクの頭にやさしく叩く

「くっそー。また、俺の負けか」

と言って座り込む

「そろそろ、出てきたらどうだ」。姫路」

俺は草むらに向かって言う

「何で、分かったんですか？」

草むらから姫路が出てきた

「俺はその場を把握するの。だから、姫路が隠れて見ていたのは気づいていたんです」

「まさか、兄貴。俺の攻撃を避ける行動をしながら状況も把握していたと・・・」

「そういうことになるねwww」

俺は笑う

「ひどいぜ。兄貴。集中していなかったのか？」

「別に集中はしていたぜ。だからお前の体力を極限まで削って止めを指しただけだ。俺は先に戻るから。姫路でも送ってこい。いいかこれは命令だ。歯向かったらっフ」

と言って去る

家に帰ると翔子が出迎えてくる

「・・・おかえりなさい。」

「ただいま。翔子」

と言ってリビングにいらつとする

すると、俺の服を掴む

「どうかしたの？」

「・・・キスをして」

上目遣い＋涙目で言われる

「しょうがないな。」

と言って翔子と久々のキスをする

「・・・ありがとう。」

顔を真っ赤にしている

「お姉さま、早く来てください」

ルリの声が聞こえる

「行こうか。翔子」

翔子は頷く

「あれ？リクはまだなの？」

「リクなら、姫路を送っていったぞ」

「なら、先にご飯食べてしましましょう」

と言ってみんなでご飯を食べる。

風呂も入り後は寝るだけ

「・・・じゅんいい？」

俺の部屋に翔子が入ってくる

「どうかしたのか？翔子」

「・・・私ね。じゅんが転校してないって聞いてとても嬉しかった」

「そっか、ありがとな翔子」

と言ってキスをする

とても深いキスを

「・・・一緒に寝てもいい？」

「いいよ。おいで」

と言ってスペースを作る

「・・・ありがとう。」

と言ってスペースに入る

「おやすみ。翔子」

「・・・おやすみ、じゅん」

俺達は眠りについた

翌朝、俺はいつもの時間に起きて朝食を作る

「・・・じゅん。おはよう」

翔子が起きてきた

「おはよう。翔子」

すると、翔子は俺にくっついてくる

「どうした？翔子」

「・・・キスして」

「しょうがないな。」

と言って俺はキスをする

「朝から、熱いね」

「誰かエアコンをつけて」

リクとルリも起きてきた

「・・・ルリとリクおはよう」

二人は挨拶をする

「お二人さん。ご飯の準備をして」

味噌汁を作りながら言う

みんなで、朝食をとった

「たまにはこういうのもいいかも」

リクは言う

「確かに、いつも3人で食べていたもんさ」

「・・・両親は？」

翔子は不思議そうに聞いてくる

「両方仕事に行っています。だから、家族全員でご飯なんてめったにないことです」

ルリは言う

「・・・私はいつも一人で食べている」

翔子は寂しそうに言う

「ならさ。俺たちとご飯を食べないか？いいよな。二人とも」

「「いいよ」」

ルリとリクは了解する

「どうする？翔子」

「・・・分かった迷惑じゃないなら食べる」

翔子は嬉しい顔をしている

俺は不意に時計を見る

8時00分・・・

「翔子。すまない。今何時だ？」

「・・・8時」

その場が固まる

「やばい。遅刻だ。翔子、走るぞ」

と言ってご飯を慌てて食べて家を飛び出して翔子と走る

学校にはギリギリ間に合った。

「それじゃ、また」

と言って翔子と分かれる

Fクラスに行くと明久と雄二が寝ていた

「おはようじゃ。じゅん」

「おはよう。秀吉。一体どうしたの？これは」

明久達を指さす

「どうやら、鉄人をお願いして、朝まで勉強していたらしいのじゃ」

「ふーん。そうなんだ。なら寝かしてやろうぜ。決勝は昼からだし」

と言って料理場に行く

その後、明久たちは屋上で寝ると言って屋上に向かった

16だよ・・・きつと（後書き）

フレーム「次はとうとう決勝だよ。勝者は誰の手に」

わーい決勝戦だよ（前書き）

書いていて鉄人が気持ち悪いと思いました。OTL

わーい決勝戦だよ

そして、決勝戦にて・・・

Aゲートside

「翔子。準備はいいか？」

「・・・うん大丈夫」

翔子はやる気まんまん

「紹介されたら出てください。」

高橋先生に言われる

Aゲートside out

Bゲートside

「雄二、とうとう決勝だよ。」

「そうだな。でも、相手は翔子達・・・どこまで食いつけるか」

「大丈夫だろ。お前たちはやることは全てやった。あとは相手にぶつけてこい」

鉄人が勇気付ける

「そういえば。なんで俺たちに協力してくれるんですか？」

雄二が質問する

「いや。ただ観察処分者からゴマ団子を貰ったから。そのお礼だ。紹介されたら出るように」

鉄人の顔が真っ赤だった

Bゲートside out

決勝の舞台では紹介されて4人は中央に集まる

「対戦科目は・・・」

ランダムで決まる

それによって俺の強さも変わる

「日本史です。それでは召喚してください」  
「『『『サモン』』』」  
俺たち4人は召喚する

『Aクラス 霧島翔子 & Fクラス 高山じゅん VS Fクラス  
坂本雄二 & Fクラス 吉井明久  
日本史 382点 497点 2

51点 210点』

「へえー一夜漬けでここまで点数を上げるか・・・」  
「・・・元神童。雄二やっぱすごい」

俺と翔子の反応

「この点数なら行けるぞ。相棒」

「そうだね。じゅんも意外と点数低いし」

明久と雄二の反応

「それでは、始めてください」  
という。

しかし両者動かない

雄二達は俺のナイフを警戒している

俺達はカウンターをしようと思って動かない

「はあ。雄二、提案がある」

「一応聞いてみよう」

「ナイフを警戒しているのか？」

俺は雄二に聞いてみる

「当たり前だろ。いくら点数を上げてもお前とは約2倍の差がある」

確かに明久とは2倍の差がある

「なら、俺はこの試合ナイフを使わない」

と言ってコートの下にあるナイフを全て落とした

「お前は素手で勝負するのか？」

「そんなわけがない」

と言って翔子の召喚獣に近づく

「・・・じゅん？何するの？」

「これを借りるぜ」

と言って鞘を借りる

「へえ、ナイフだけじゃないんだ」

「明久、俺と勝負だ」

と言って俺の召喚獣は明久に飛び掛る

「危な」

と言って明久はよける

「隙だらけだ」

と言って雄二は殴ろうとするがそれを翔子が止める

「翔子。そっちは任せた」

俺は明久と戦う

明久の召喚獣は俺の怒涛の攻撃をしてくる

俺はそれを最小限の動作でよけてる

「くっ、当たらない。僕の方が扱いは慣れているのに」

「確かに、お前の方が慣れているかもしれない。よけながら攻撃とかは出来るかも知れないしかし、よけるぐらいなら慣れれば簡単だ」

明久の召喚獣に攻撃のスピードが遅くなってきた

雄二は俺が何をしようか気づいた

「明久、じゅんの召喚獣から離れるんだ」

雄二が指示するが

「残念。もう遅い」

明久の召喚獣に連打を浴びせた

「油断大敵だぞ雄二。翔子。そろそろ、決めてやれ」

「・・・分かった。」

翔子は雄二の動きを見て雄二の召喚獣をまっぴたつにした

「勝者。霧島、高山ペア」

観客が盛り上がる

わーい決勝戦だよ（後書き）

ちよつとした雑談

翔子「・・・所で何で日本史のテストだけ点数が低いの？」

どうやらさっきのテストの点数の事を聞いてくる

じゅん「一応、手加減をしたつもりだったけど・・・まあ最強コンビならこれくらいへっちゃらか」

翔子「・・・そうだね。」

このことは雄二達は知らない

表彰式だよ

「表彰式をしますので3年の常村君と3年の夏村君は至急下に降りてきてください」

表彰式の準備をしている

「・・・じゅんと遊園地」

「そうですね、はじめてのデートだな」

楽しそうに話す

前に学園長が出てきた

「では、表彰式を始めるよ。3位。3年常村、夏川ペア」

「「はい」」

一応3位決定戦をやったようだ

3位の商品は学食の無料券だった

「2位。2年坂本、吉井ペア」

「「はい」」

2位の商品は図書券と商品券だった

「じほん。それじゃ、1位。2年霧島翔子、高山じゅんペア」

「はい」

俺たちは学園長の前に行き盾と商品をもろう

すると学園長が俺たちに耳打ちする

「後であたしの所にきな」

なぜか、グランドパーク以外の商品を渡して終わらせる

表彰式が終わり俺と翔子は学園長室に向かう

ドアをノックして返事を待つ

「誰だい？」

中から返事が帰ってくる

「2年の高山と霧島だ」

「入りな」

俺と翔子は部屋に入る

「立ち話もあれだし。そのソファーに座りな」

学園長もソファーに座る

「それで、話ってなんですか？」

本題に切り込む

「商品についてさ。」

「・・・それって、腕輪についてですか？」

「そっちじゃないんだよ。チケットの方さ」

「チケットがどうかしたんですか？」

「実は、グランドパークの方から開園を延期すると言われてチケットがパーになったわけさ」

「・・・それじゃ、チケットは・・・」

「残念だけど。」

その場が重くなる

「それなら、代わりの物を用意したんですか？」

「一応さ。お前たち2人は召喚獣の装備を好きに変更させてやろう  
と思うて」

「どうする？翔子」

「・・・じゅんとペアルックがいい」

学園長にいろいろ言って俺たちの召喚の装備変更が完了した

「そうだ。腕輪とかも使っていていいですか？」

「丁度いい。使っていていいよ」

俺は説明書を読む

「＜ブラッド＞」

月光の腕輪を付けながら言つと俺の召喚獣が出てきた

「・・・これは」

俺の召喚獣に黒い翼が生えていた

『数学 高山じゅん 830点』

「すげー翔子もやってみるよ」

「・・・分かった。＜ライカー＞」

日光の腕輪を付けた翔子が言つと翔子の召喚獣が出てくる

翔子の召喚獣には白い翼が生えていた

『古典 霧島翔子 398点』

「翼を付けるだけか」

と言つて周りを見るとあることに気づく

「学園長。召喚許可は出しています?」

「出していないよ。両方に言えることはフィールドを作れるということだよ。それと、もう一つ」

学園長はボールを俺に向かって投げた

俺の召喚獣は反応してキャッチする

「物理干涉も可能になった。装備はそれでいいかい?」

俺達は召喚獣みる

俺のは翔子が使用している刀がついて

翔子は鎧からコートに変わってナイフが装備された

「・・・問題ないです」

「俺も問題ないけど」

「何だい?言ってみな」

「俺の腕輪の効果についてです。完全行動はナイフの時のみ。刀がついたということは主に刀で戦います。ナイフの意味が無くなるんですけど・・・」

学園長は考え込む

「なら、お前さんの腕輪の効果も特別に変えといてやるよ」

「ありがとうございます」

「分かったんなら帰りな」

俺達はその場を後にする

## 表彰式だよ（後書き）

月光の腕輪：召喚獣に黒い翼が着いて飛べる様になる。↑悪魔をイメージ

日光の腕輪：召喚獣に白い翼が着いて飛べるようになる。↑天使をイメージ

二つに共通していること：どちらも、物理干渉有り。フィールドも作れる（ランダムだが）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1058v/>

---

バカと記憶と召喚獣

2011年10月18日11時57分発行